

16:1 レマルヤの子ペカの第十七年に、ユダの王ヨタムの子アハズが王となった。

16:2 アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、彼の神、【主】の目にかなうことを行わず、

16:3 イスラエルの王たちの道に歩み、【主】がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の、忌み嫌うべき慣わしをまねて、自分の子どもに火の中を通らせることまでした。

16:4 彼は高き所、丘の上、青々と茂るあらゆる木の下でいけにえを献げ、犠牲を供えた。

16:5 そのころ、アラムの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、戦いのためにエルサレムに上って来て、アハズを包囲したが、攻め切れなかった。

16:6 このとき、アラムの王レツィンはエイラトをアラムに復帰させ、ユダの人々をエイラトから追い払った。ところが、エドム人がエイラトに来て、そこに住みついた。今日もそのままである。

16:7 アハズは使者たちをアッシリアの王ティグラト・ピレセルに遣わして言った。「私はあなたのしもべであり、あなたの子です。どうか上って来て、私を攻めているアラムの王とイスラエルの王の手から救ってください。」

16:8 アハズが【主】の宮と王宮の宝物倉にある銀と金を取り出して、それを贈り物としてアッシリアの王に送ったので、

16:9 アッシリアの王は彼の願いを聞き入れた。アッシリアの王はダマスコに攻め上り、これを取り、その住民をキルへ捕らえ移した。彼

はレツィンを殺した。

アハズはユダの中では最悪に属する王で、「異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまねて、自分の子どもに火の中を通らせることまでした」とあります。これは当時の異教の風習のひとつで、人をいけにえとしたのです。

このようなことを主が許すはずはなく、アラムやイスラエル（北王国）を用いて、ユダに試練を与えました。しかし、アハズ王は自分の行いを改めるところか、神よりも強国アッシリアに依り頼みました。

アッシリアは後にイスラエル王国を滅ぼす危険な大国ですが、このようなアッシリアに対してアハズ王は恭順の姿勢を最大限にしめし、頼りとしました。このように自分の身に起こることに対して、神の視点がないと、人は全く逆の方に進んでしまいます。

自分の身に起こることや状況などを、神の視点で見るといってしまおう。すなわち信仰の目で見るといってしまおう。そうでないとアハズのように、逆のことをしてしまい、かえって苦難を招くことになるからです。それはみことばから気づかせていただくことが一番です。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

